フィールドで考える

「慈愛」に覆い隠された僧侶のジレンマ

岡部 真由美
大谷大学助教

「慈愛」に満ちた僧侶

北タイにおける最大の都市チェンマイ。そのチェンマイ市街地から、北東へわずか二〇キロメートルほど離れたところに、わたしがほぼ毎年調査に訪れる、ひとつの仏教寺院がある。今年で六六歳を迎える、この寺の住職は、いつも優しげな微笑みをたたえ、落ち着いた雰囲気に包まれている。穏やかな声に、上品な立ち居ふるまい。会話の端々に冗談を織り交ぜる茶目っ気だってある。そんな住職は、「僧侶は社会のために働かなければならない」という考えのもち主である。

タイをはじめとする東南アジア大陸部で広く信仰されてきた上座部仏教の僧侶たちは、一般的に、戒律を厳しく守ることで知られている。戒律を守り、経典学習と瞑想修行に勤しむことで、涅槃を目指す僧侶たち。その彼らを、衣食住のあらゆる面からサポートすることで、徳を積む在家者たち。この明確な線引きこそが、両者を、儀礼や日常のさまざまな場面を通じて互恵的に結びつけているのである。

ではなぜ、「僧侶は社会のために働かなければならない」のだろうか。その理由を、住職は、経典に依拠して、仏陀が弟子に捧げた任務だからだと説明する。僧侶は日々、在家者のサポートなくしては生きられないから、在家者が困難に直面した際には、共に解決にあたることで「返礼」しなければならない、と。住職がこれまで約三〇年間、農民の貧困、エイズ、高齢者や森林保護にかかわる活動を熱心におこなってきたのは、何が「社会のため」になるのかという問いに対する、住職なりの答えであった。村人たちは、この住職のことを、「慈愛」に満ちた僧侶として高く評価していた。

儀礼後の饗食で在家者と語らう住職

心優しくばかりはいられない

調査を続けるうちに、わたしは時折、この「慈愛」に満ちた僧侶が、人知れず、頭を悩ませている場面に遭遇するようになった。「ルアンポー（僧侶の自称）だって、いつも心優しくばかりはいられない」。これはあるとき、住職が、わたしに向かって吐き捨てるようにつぶやいたことばである。

住職の悩みの種は、寺の所有地内に暮らす住民の存在にあった。この寺は、小高い山の上に建てられており、山の頂からすそ野にかけての土地すべての所有権を有している。しかし、寺の所有地と一般の土地が接する、すそ野部分においても、寺の所有地を示すような囲いは設置されておらず、一見するだけでは、寺の所有地と一般の土地の区別はつかない。この境界が曖昧な場所に、異なる宗教や民族を背景にもつ人びとが全国各地から移住することによって、インフォーマルな居住空間が形成されているのである。

タイでは、寺の所有地は、法的に自由な売買が禁じられている。しかし、この寺の所有地内に暮らす住民のなかには、そのことを知りながらも、現金収入をえようと第三者に転売したり、賃貸したりする者が後を絶たない。また、住民の大半は、建設、洗濯、草刈りなどの賃労働や、市場での物売りで生計を立てる低所得層である。しかし、住民たちが昼間から、なけなしの金で酒盛りを楽しむ風景は、ここでの日常と化している。住民たちに関するこうした情報は、回り回って住職の耳にも届いている。違法とわかっていながら、なぜ土地の売買や賃貸を続けるのか。経済的に困窮するなら、なぜ必死で働かないのか。いつもは微笑みをたたえる住職も、この話題になると、顔色が曇り、語気が強まってしまう。

寺の所有地内で洗濯業を営むムスリムの親子

ジレンマとの戦い

しかしながら住職が、寺の所有地から住民たちを強制的に排除したり、罰金を課したり、あるいは監視を強化したり、といった強硬策に乗り出したことは一度もない。住職が講じてきたのは、せいぜい、所有地内に看板を設置し、無断で家を建てないように呼びかけたことや、所有地内の住民のみを対象とする基金を設立し、住民同士の相互扶助を奨励したことくらいである。もちろん、これらの遠回しな方法はいずれも、まったくといってよいほど、住職が期待するような効果を生まなかった。他にも、住職は、賃借料の徴収を開始すると何度もいいながら、いまだ実行に移すことをためらっている。

住民たちの不法行為や生活態度が目に余ることは、所有地の管理・利用に責任を負う住職にとって、都合のよくない話である。なぜなら、このまま放っておくと、寺の評判を落としかねないからである。かといって、住民たちに対して強硬策に出るわけにもいかない。なぜなら、もしそうすれば、住民たちのあいだで不満の声が噴出するだけでなく、他の村人たちからも「心が狭い」と非難されるに違いないからである。これでは、「慈愛」に満ちた僧侶というイメージに傷をつけてしまう。住職にできることは、住民たちの様子にアンテナを張り巡らせつつ、事態をこれ以上深刻化させないために、ときにやんわりと釘を刺すことだけである。僧侶の「慈愛」とは、こうしたジレンマのうえに成り立っているのである。

今日のタイ社会においては、この住職のように、開発の進展に伴って生じたさまざまな現実的課題の解決に、自ら積極的に取り組む僧侶が少なくない。しかし彼らには、個々の課題を解決するスキル以上に、在家者とのほどよい距離のなかで、自らに与えられた良きイメージを保ち続けることができるか否か、その力が試されているのである。

寺の所有地内にある山地少数民の家屋